ソーシャルワーカーの視点とＩＣＦ

指定討論者：島野　光正　郡山市医療介護病院保健福祉等事業推進室長

講演概要

はじめに

ソーシャルワーカーは「人間の行動と社会システムに関する理論を利用して、人びとがその環境と相互に影響し合う接点」（ＩＦＳＷ 2000.7）に介入する。しかし、このことを他の専門職に説明しても理解しづらい面があった。共通言語としてのＩＣＦによる説明ではどうだろうか。

１．事例Ａさん（８０歳）脳梗塞後遺症（右上下肢麻痺身障２級）
　妻（７０歳台）と２人暮らし（Ａさんは老人保健施設入所中）

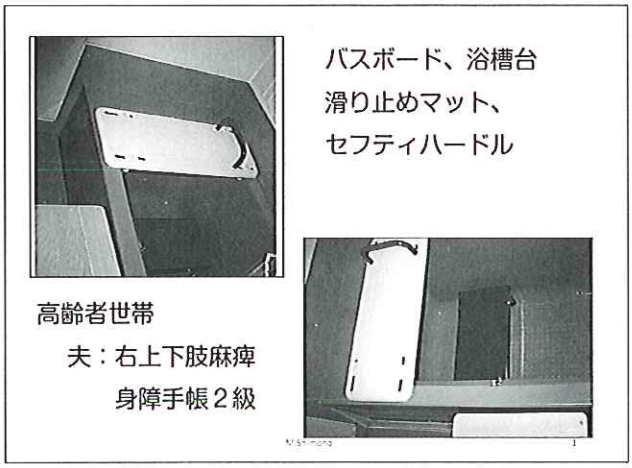
【経過】

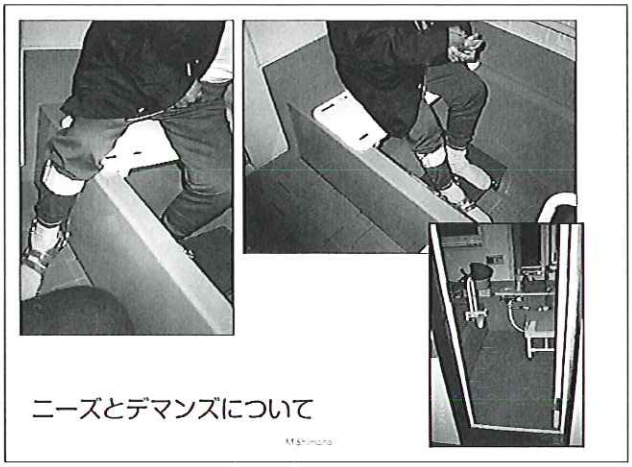
老人保健施設相談員より連絡あり。夫婦２人暮らしの高齢者で、夫（Ａさん）が老健入所中。
今回Ａさんについて１カ月だけ自宅に戻るので在宅の支援をして欲しいということ。

・本人、妻の了解をいただき、施設内で面接（アセスメント１）
・その後自宅を訪問する（アセスメント２）
　→　（妻）家でみるのが大変だから施設にお願いしている。
・いろいろと話をしているうちに「風呂入れが大変だ」ということを具体的に話しはじめる。
　→　本人の状態と自宅の状況を考え合わせ、制度の活用によるサービスの利用と福祉用具等の提案を行う。

【サービス調整】

・福祉用具だけではなく、デイケア、訪問看護、訪問介護などを組み合わせる。





・その後１カ月が経過したが、結局老健には戻らず自宅での生活が継続された。
・ＡさんやＡさんの妻の想いは、１カ月だけ自宅に戻ることではなく、夫婦で自宅で生活を続けるということ。
・「風呂が入れない」→「デイケア」で入浴ということだけのプランであったら結局１カ月したら老健へ戻っていたかもしれない。

２．事例を振り返って

（１）「ニーズ」と「デマンズ」について。

・デマンズは「一カ月だけ自宅に帰る。その間なんとかして欲しい。」
・ニーズは「自宅で夫婦２人で生活を続けたい。」
→なぜ「夫婦２人での在宅での生活」が続けられたのか。

（２）Ａさんの状態が劇的に良くなったということではなく、Ａさんの状態に合わせた環境への働きかけを行った。

→Ａさんが自分で力を発揮できる環境への働きかけ
→Ａさんの生活が、Ａさんの妻の「想い」を変化させた
→結果ＡさんとＡさんの妻の関係が変化していった
「ほんとうは、自宅で２人で生活したかった」ということが言えた。
（お２人の中に、そういった「想い」を実現できる力があることに気づいていったプロセス：サービスを使いこなす力、サービスを利用していけば自分たちの想う生活が実現できる力など）

３．悪循環から好循環へ

（１）交互作用の「力」

ＩＣＦでは各次元・要素が相互に関連しあって、生活機能を構成すると考えている

（２）ソーシャルワーカーは一般的に生活上の問題（生活課題・福祉課題）は「ある問題をもった人と環境との交互作用の結果」と考える

４．まとめにかえて：「参加」のとらえ直し

Ａさん、Ａさんの妻にとっての「参加」
→変化していく
私たちの仕事はサービスにつなげることでも住宅改修の相談に乗ることではなく、それは手段であって、大事なことはサービスの利用や環境への働きかけによって、お２人の中にサービスを使いこなしていく力があること、サービスを利用することで想いが実現できる力があることに気づいていただくこと。

ICF とは

WHO-FIC における中心分類の一つである ICF

○ ICF は健康状況と健康関連状況を記述するための、統一的で標準的な言語と概念的枠組みを提供することを目的とする分類です。

○ WHO が総合的に管理運営している WHO-FIC（世界保健機関国際分類ファミリー）(※) の中心分類の一つです。

○ 厚生労働省では、社会保障審議会統計分科会の下に、生活機能分類専門委員会を設置し、WHO の動向等を踏まえ、ICF に関する具体的な事項について検討を行っています。

（※）WHO-FIC（世界保健機関国際分類ファミリー）
WHO は、保健関連の重要課題を効果的に処理するためには、データベースを用いて、問題を識別し、記述する必要があるとしています。具体的には、保健関連の課題について、原因を調査し、その内容を記録したり、実施した介入等について、進捗状況を監視し、評価したりするために、国際比較可能な標準化されたデータベースが重要であるとの認識です。この認識に基づき、WHO は、保健分野に関する分類体系を提示しています。これが国際分類ファミリー（WHO-FIC：WHO Family of International Classifications）と呼ばれるものであり、ICF はその中でも、ICD（国際疾病分類）と並び、中心分類の一つとして位置づけられています。
（詳細は http://www.who.int/classifications/en/ を参照）

ICF の評価を用いるときの基本的考え方

○ 分類項目は、それぞれについて、その評価と一体で用いられます。

○ 分類項目は、ひとりの方について全人的に把握することが可能な設計となっています。ただし、実際に活用する場合に、全ての項目について調べ把握することを求めているものではありません。

○ 評価を行う際に用いる分類項目は、WHO が提示したものを用い、その定義に従ってください。その中で、どの分類項目を用いるかについては、特定のものに限定されるものではなく、目的に応じて変わる可能性があります。

○ 健康状態や環境等、様々な要素が生活機能に対して相互に影響を与えうるとされており、そのことが ICF では重要視されていることを理解して活用してください。